総合芸術的な表現活動のもたらすもの
—上越教育大学附属中学校 10 年の取り組みから—
時得紀子

目的
平成 9 年度に産声を上げた、上越教育大学附属中学校のミュージカルの創作活動は、今年度で 10 年という節目を迎える。こうした実績などが評価された同校は平成 16 年度に文科省研究開発学校の指定を受け、今年度は 3 年間の最終年度となった。

音楽科を核としてほぼすべての教科がかかわることから発足した、同校の生徒によるミュージカルの創作活動の継続研究の成果と今後の課題について、主として音楽科の視点から分析していく。さらに中学校における総合表現活動の意義について検証する。

結果
教科横断的な学習はテーマを基に各教科が関連していくスタイルが多いが、この表現創造科の実践のように表現活動を横断させてアプローチすることにより、新しくかつ幅広い表現、生徒の主体的な表現を導き出す成果や、創造力の育成が認められる。

同校の実践では、表現の基盤が音楽表現であり、音楽科という教科の総合性、拡張性が示唆される。

この特質やコミュニケーション力の育成を研究指定期校等以外の一般校における音楽科の教科学習においても積極的に取り入れていくことが望ましい。

方法
近年の同校のミュージカルの創作はかつてのほとんどの教科がかかわる活動から、音楽科と美術科と総合学習を合併させた「表現創造科」を核として、今日的テーマについてさまざまな教科がかかわる活動へと変容してきた。

過去10年間のカリキュラムの変遷は、紙幅の都合上割愛するが、平成 16 年度研究開発学校指定以降の実践事例を分析対象の例として以下に示す。

「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発」を課題に掲げ、既成教科の枠組みを大幅に改編し、「情報活用科」、文化と学級活動を一体形じさせた「人生ゼミ」、総合的な学習の時間と音楽科、美術科を一体とし総合的な表現活動を培う「創造表現科」等、新たな 10 教科を編み出した。「創造表現科」において3年生は、中学3年間の学びの集大成としてのミュージカル制作が中心となり、年間で音楽科 35 時間、美術科 35 時間、総合的な学習 50 時間の計 120 時間を費やす。

田中博之が示す、「総合表現活動のためのスキル育成について」にも示される、主体として必要とされるようなさまざまなスキルの観点が実際の創作活動では求められているといえよう。

・多様な作品を鑑賞して、特徴ある表現技法を取り出ることができる。表現テーマに関して必要な資料を収集することができる。・調査、台本づくり、リハーサル、上演に関わる分担を明確にして自分の役割を果たすことができる。・照明・音声・ビデオカメラ・コンピュータ等の機器を操作することができる。・自分や友達の演技について評価して改善案を出すことができる。・イメージを明確に持って表現（身体、言語、表情、歌、演奏）することができる。

内容
現在では附属中の伝統として中心的行事に位置付けられるが、過去2年間の同校の実践概要を具体的に示し、その成果を踏まえた考察を加える。）
『手づくりショータイム—舞台芸術に挑戦—』（2006年2月3日）
【1】実践の概要
①ガイダンス②少人数グループに分かれ身の周りにある素材（デッキブラシ、バケツ、ゴミ箱等）の音色を使い、リズムフォーマンスを作る。③スポットライトの使用法を学習し、グループ同士にベアになりお互いのグループのリズムパフォーマンスの照
明を行なう。④完成したパフォーマンスの発表
【2】実践の考察
3年生のミュージカル実演に向けて取り組まれる単元であり、スポットライトの使用法等の技術を学びながら、ミニュチュア「舞台表現」を創作する学習。表現の基となるものは、身の周りにある素材の音色を重ね合わせながら創作するリズムパフォーマンス。さらにスポットライトという色の表現の学習と横断させることにより、音楽表現と色彩表現のコーディネイトによって新たな表現を生み出すだけでなく、「観客を意識した表現」という舞台表現の基礎となる表現方法に気付き、視覚的なパフォーマンスを創造していく。
製作過程の授業においては、グループ学習の中で、相手に合わせてリズムを作り出す、素材の音色を試行錯誤する等の姿が見られた。スポットライトでフォーマンスに合わせる活動も含めて、生徒同士によるノンパースルミュージケーションを育てる活動に導かれている。また、「身の周りの素材」「リズム」「照明」という複数の表現を横断させることにより生徒が主体的に新しい表現を作り出していたことから、「創造力」をも培っていたものと考える。

2 「声とからだでハーモニー — Let's Enjoy! Chorus & Dance —」（2005年10月 3年生）

(1) 実践の概要
①ガイダンス②「きとうきび畑（寺島尚彦作詩・作曲）」の混声四部合唱を詩からの情景や心情、作曲者の思い等、意見交換をしながら作り上げた。③この合唱曲に合った身体表現を創作し、舞踊家やチアリーダーなどの外部講師からの指導も受けながら練り上げ、Chorus & Dance を創作。④発表会を開く。

(2) 実践の考察
単に音にリズムダンサーズをつける活動ではなく、「曲章」に合わせて身体表現を創作したことは、生徒の曲への思いや、表現したいことをより身体を通じて前面に出す方向へと導かれたようだ。

また、集団での身体表現は互いを意識しながら作りあげることを必要とし、生徒達も「統一感」を課題に外部講師の指導を受けていた。この「統一感」は、身体表現のみならず音楽表現においても求められ、Chorus & Dance が一体化した新しい表現活動となっておりが示唆された。

3ヶ月後に行なわれた本番のミュージカルでは、この学習経験が生徒自身によって活用されていた。

このように、同校の実践の学びの過程では、生徒同士のコミュニケーションが大切にされている。音楽科はコミュニケーション力という日常的な学力を育てることが可能な教科であることを認識し、実践や評価の手がかりとしていくことが望まれる。

3 「体験！総合芸術—ミュージカル—」（2005年4〜12月）における音楽表現について

(1) 実践の概要